

佐東の文化

No.34

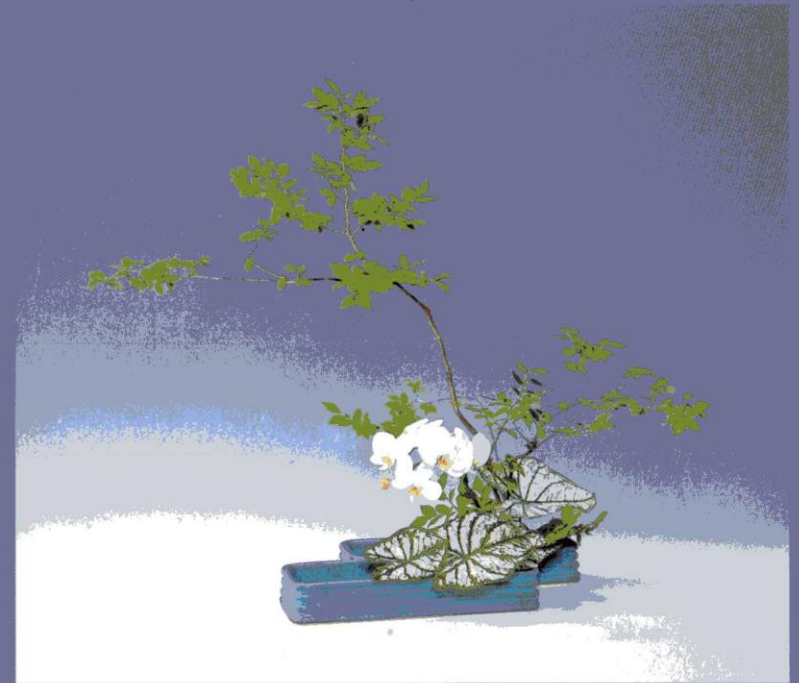


洋画 谷口美智子

平成20年10月15日

佐東の文化

No.
34



佐東文化協会

目次

巻頭言

「作東」を文化の発信基地に

横山 猛……………1

特別寄稿

黒い新聞紙……………阿部 雲 魚……………3

かな凶鑑について……………阿部 雲 魚……………3

坂井三葉さんとの出会い……………岡田 千茶……………4

所感寸言

藁と竹……………衣笠 隼 巳……………7

先入観……………井上 健 一……………8

老いのたわ言……………吉 政 実 夫……………9

その二……………吉 政 実 夫……………10

随筆随想

二匹の猫……………井口 祥子……………12

おやくつさま……………長瀬 加代子……………13

私の終戦……………黒石 貞 子……………15

胡瓜に教えられ……………加藤 美 雪……………16

歴史紀行

別所山幸福寺の考察……………番 能 文 郎……………19

美作の山城を訪ねて……………光 井 和 彦……………20

古代への空想・夢を誘う……………加藤 芳 英……………21

短芸

詩

獅子舞の里……………田中 清 一……………24

老兵の叫び……………早 水 春 男……………25

俳句

初暦……………春 名 静 山……………26

迷い蝶……………杉 本 幸 子……………26

テレビの篤姫を見て……………江 見 英 雄……………27

なれるなら……………田 中 清 一……………27

雨蛙……………坂 部 金 治……………27

春風……………山 本 登 山……………27

友迎ふ……………宿 野 淑 子……………28

白鳥来たる……………山 下 照 夫……………28

春雷……………小 玉 安 子……………28

誕生日……………加 藤 美 雪……………28

一盛りのお蜜柑……………井 口 秀 子……………29

四季折折……………山 本 靖 子……………29

時鳥……………春 名 波 留 夫……………29

赤とんぼ……………樽 井 清 江……………29

よもぎ……………井 口 祥 子……………30

四季の詠……………青 山 美 和 子……………30

農一筋……………青 山 元 江……………30

折折に……………釜 田 玉 枝……………31

題 字

山 本 章

朝影	新免三代	43
神仏	原田順子	43
逝きにし兄へ	有元理嘉子	44
山家川	新田千晶	44
瀬戸の海	梅本信恵	44
みんな同胞	釜田玉枝	44
山つつじ	小林洋子	45
罪人の如く	江見眞智子	45
青年	橋本巴子	45
窓	福島美智子	45
三姉妹	船曳文子	46
友よりの文	北村和子	46
父の面顔つ	新免初子	46
老の空耳	黒石貞子	46
娘の電話	黒石登代	47
今年も生きて	森本かよ子	47
われが今知る	阿部すみゑ	47
朝のしじまに	中川富美枝	47
瀬戸大橋	長澤和枝	48
幼日	加藤保子	48
近況	末宗千歳	48
私の生き甲斐	角南三津ゑ	48
ふるさとの川	角利津	49

我であり	坂井はつ子	31
川柳		
霊界の歩み	江見英雄	32
敬老会	春名静山	32
五輪へ夢を	山下照夫	32
聞く	山本千恵	32
懐古	新免三代	33
想い出	遠藤三栄	33
すれちがい	名部みどり	33
手	太田智子	33
老いる日々	名部和子	34
宵の月	山本登山	34
山	山本昌子	34
本音	衣笠隼巳	34
短歌		
どうなる	坂井はつ子	35
芽	加藤幸子	35
湯立て神事	春名静山	36
心して読む	江見英雄	36
独り居	岩本敏子	36
「中華」の国どう変わるか	加藤芳英	36
桜咲く	山下照夫	37
蟬	杉本幸子	37

山桜	山下三代子	37
野良猫	坂部金治	37
春	井上さかゑ	38
わが村	名部みどり	38
房総の海	安西苑	38
剛と散歩	藤本伸子	38
平和日本	横林富砂子	39
童らと	池田保子	39
初燕	原田幸子	39
折りにふれ	荒尾登志ゑ	39
折折に	鳥形節子	40
春	光井房子	40
折折に	森本久子	40
をさなご	名部和子	40
日捲り	清田三智子	41
孫	内藤慶子	41
元氣	大内佐智	41
紅引きて来ぬ	梅澤ヒデ子	41
をりをりに	加百由起子	42
生ありて	横山昌子	42
笑顔を信じて	横山美恵子	42
生き甲斐	小林増代	43
鳥もいろいろ	宿野和穂	43

音符のすずめ	徳野富美子	49
ふうせんかづら	入矢敏江	49
例へば	日下智加枝	49
吉事祝ひて	浜田くに子	50
達観	川崎晃	50
木末は高し	三浦智江子	50
息嘯の霧	関内惇	50
作東文化協会グループ紹介		51
作東文化協会会則		55
平成19年度 作東文化協会事業報告		57
平成19年度 作東文化協会決算報告		58
平成20年度 作東文化協会会員・役員名簿		59
編集後記		70

表紙説明

題「涼風」生け花

夏の暑い日の時折かすめる優しい涼風をイメージして生けました。

杉本幸子

〔巻頭言〕 「作東」を文化の発信基地に

会長 横山 猛

美作市文化連盟が発足して四年目となりました。今年は、文化連盟として全体的な活動を推進していくと、芸能部門・展示部門を設け、発表の場を増やすことになりました。芸能部門は、美作文化センターで行われますが、展示部門は、作東の地で行われることになりました。幸いに、作東には、文化芸術センター・農村環境改善センター・B&G海洋センターなどの施設がありますので、六文化協会の作品を展示しても、それに何とか応えられるだけのスペースがあります。

考えてみますと、文化の薫り高い市には、たいがい立派な博物館や美術館や公園などがありますが、残念ながら美作市には、自慢できるほどの施設はありません。しかし、先人の御蔭で、作東には、前記のような施設があります。作東文化協会としては、これらの施設を大いに活用して、秋の文化展・春の文化展を開催してきました。この実績が認められたのでしょうか、文化連盟の「春の文化展」が開催さ

れることになったのです。大変喜ばしいことですので、これをきっかけに活動を盛り上げ、さらに文化を発信していきたいものです。

さて、御承知のように、平成十九年十月一日、バレンタインパークが、県下二番めとなる「恋人の聖地」に認定されました。(NPO法人地域活性化支援センターから)そこで、これを文化活動にも発展させたいと、和風庭園側の遊歩道の両側に、ゝ文芸愛の小径と名付けて、歌碑・句碑を建てたいと考えています。この事業は、「愛」を主題とした短歌・俳句・川柳の碑を建てようとするもので、着工は来年の秋、完成は再来年の秋を予定しています。応募の要領は、市の広報紙「みまさか」十月号に掲載しましたので、経費は自己負担となりますが、奮って応募下さい。完成すれば、バレンタインパークもまた、文化の発信基地として、衆目を集めることでしょう。

いずれにしても、座して手を拱いては何も発信できません。一つ一つの事業を心を込めて為し遂げていくことで、「作東」を文化の発信基地として定着させることができます。そして、そのことが、会員皆様の文化向上につながると共に、作東文化協会の発展に美作市文化連盟の発展につながっていくのではないのでしょうか。

特別寄稿

黒い新聞紙

阿部 雲魚
(書家 岡山市)

今日も真黒に墨に汚れた新聞紙を一番に手にする。この習性が、はや長期間続いている。何十年も一紙ずつの新聞紙に字を書くのは一切無心になって書けるので毎日用ふ。明日も明後日も大体その新聞を抜けて字を書く。

今日は仮名文字を書く。馴れ切ったこの紙にでも一札三拝して書き始めるのは習慣である。今日一番初めには、九十有六の如月九日の誕生日を過ぎてなお、平仮名と変体がなの調和体を自然にすらすらと書く。紙への抵抗は全くなく、自然に筆が動く。筆の走る音が微かに聞こえて耳朶に響く。嬉しい老人の朝の一瞬の快事の一つ。二時間ほど、古筆の仿書が終わるのは六時頃が多い。直ぐに一休息で床に入り臥す。眠ることもあり、そのまま朝食まで眼が開いていることもあり、何事も無理無駄はしない。今朝は某老画家が来家してその新聞紙を大切にす

と求められ、差し上げた。不思議な真黒い古い古い新聞紙である。この紙はどうなるか、幸あれと祈るのみ。愛は何時までも変ることはない。

(平成20・6・9記 96翁)

かな図鑑について

手元に「かな図鑑」の一冊が何時も位置を保持している。この図鑑は昭和三十七年二月十九日、美作市江見の衣笠書店にて買い求めし帖風の手元に便利な書物である。書芸文化院発行の平安朝かな名蹟全集の中の一冊として、飯山春敬氏の心遣いでかな手本の最良の書物と信じている。爾来今日まで長い年月の愛書の一つであり、私のかな習書の助けになったことか。本の形も、扉も傷ついて、見る影もないが、私の愛書中最大の書物である。この一冊が私のかな書を生むことになった。相当日数をこの書

物を眼にして学びしことか。この一書で上代仮名の全体を知り、古筆の真を知り、古筆復整日本の大家田中親美先生も賞讃された。今はこれを知り、益書の一頁を繙く人もないと思う。

これだけの平安朝古筆を一葉ずつ克明に抽出し、後世に残した人は少ない。見る度に感謝して今日も明日もと頁をめくる。有難き哉この一書、うれしき哉この一書あり。
(平成20・8・9記 96歳)

坂井三葉さんとの出会い

岡田 千茶
(朝日新聞岡山柳壇選者)

終戦の日から半年後、私が台湾から復員して来た時、戦前と違い、集落は街から帰ってきた人達で若さが溢れていた。私も青年団に仲間入りした。小さい集落の中で私は、長瀬、久能という二青年と仲良しになり、連れ立って津山へ映画を見に行ったり、お揃いの中折れ帽を買ったりした。

三人は津山市で岡山県警察の採用試験を受けた。所が中途半端な気持ちで試験に臨んだ私だけが合格した。その後、長瀬君は大阪府警、久能君は兵庫県警にそれぞれ採用されて赴任した。当時、倉敷市水島にあった岡山県警察練習所に入ったのは昭和二十二年五月で、半年の教習を受けて、新任巡査として赴任したのは片上(現備前)

警察署だった。そこで、実に運命的な出会いをした。と言うのは、今日の私を形作る上で、当然ながらその当時、全く予想もしなかった。

私たち新任巡査に同行して、初歩的な警察実務の實際を指導してくれたのが坂井 豊巡査で、彼はその時既に「三葉」と号して、現在の西大寺川柳社の原型である川柳社を先輩の川柳人と二人で結成していた。彼はそのことを、おくびにも出さなかつたので知る由もなかつた。

翌年三月、警察法が改正されて国家警察と地方警察に分かれることとなり、私は坂井巡査と共に岡山市警に転勤させられ、岡山東警察署に赴任した。彼は外勤一筋、私は昭和三十一年から交通課勤務となり、当初、運転免

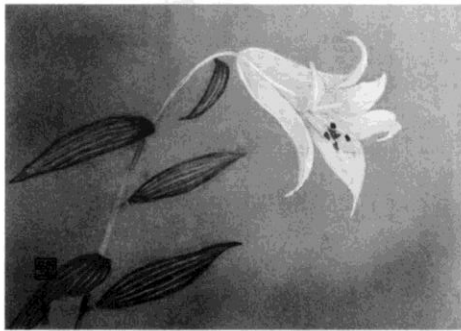
許事務を担当した。

その頃、川柳ブームが興り、国鉄、郵政、司法、市役所など各職場にも川柳会が組織された。東署も坂井巡査主導で川柳会を作ることになり、彼が私の事務机の処に来て「是非川柳会に入れ」と勧めた時の、彼の表情は現在でも鮮明に記憶している。川柳会ができて数ヶ月後、会の名前を付けることになり、私の提案で、自分ではない句だと思つて提出しても、選者はなかなか採ってくれないことが多いことから「磯の鮑の片思い」をもじつて、せりりゅう「あわび会」とした。

あわび会は順調に続いたが、何せ、転勤の多い職場、五年程して会員が減少し、三葉さんの退職もあつて、いつの間にか立ち消えとなつた。三葉さんは、小柄で見るとからに飄々な人だった。彼とは他の職場川柳や、各地の川柳大会、同僚が地元で作つた小さい川柳会にも同行した。彼に勧められて昭和三十四年、岡山県内、最大の川柳結社「岡山川柳社」の会員になり、後同人となり、同誌同人近詠欄の選を担当した。

昭和三十七年、肺結核で国立岡山病院に入院中、朝日新聞岡山柳壇へ投句を始めたが、後に、この欄の選をするようになるとは予想もしなかつた。

昭和六十二年二月、先輩と川柳結社「川柳塾」を立ち上げ、柳誌の編集を担当、現在は代表を務めている。このように、退職後、各地の川柳会とも関わりを持つようになり、川柳一筋に暮らしているのは坂井三葉さんとの出会いがあったればこそと、今更のように思いを深くしている処である。



日本画 珍珠 純子

感想寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



写真 水島 正崇

全国はどこかで毎日のように凶悪な事件や事故が多発している。何が治安の良い国だと言いたくもなるが、日常生活の中で衣食住だけを考え、ると世界水準より上位にランクされる。毎日の生活の中に新しい文化や知識が入り込み、古い文化は廃れ、消えて行くのも時代の趨勢と言うものか。

今日は先人達が営んで来た生活の中から今は忘れ去られた藁と竹について振り返って見たい。今、一般家庭の中から藁や竹を探してもまず見当たらない。無理に見つけるとすれば庭掃除の竹箒か熊手くらいなもの。花や野菜の支柱でさえ金属製のポー

ルである。縄文時代の昔から現代まで（少なくとも昭和三十年頃）を振り返って見ると、よく知恵を絞って生活の中に取り入れたものだと感心する。

先ず藁から見てみよう。人が移動するのに歩く以外に手段がなかった頃から履物として草鞋わらじになり、草履ぞうりとなった。米が主食となったらその籾を干すのに筵むしろとして活躍し、米になれば貯蔵の為の俵かますとなり、肥料や塩などの入れ物は吠かますとなった。近頃の家庭では使用が少なくなったが藁は藁であり、家を囲う土壁には藁を切った苧すさをふんだんに土に混ぜる。また藁を繕よって作った縄は実には用途

が多い。神妙にお縄を頂戴しろ、引くに引けない縄張り争い、等、言葉の中にさえ登場する。どこの農家でも飼育されていた耕牛馬の飼葉かひとなり、果ては落し紙の代用にもなったと聞く。今、稲刈はコンバインで行うため藁束とてないが、子供の頃藁ぐるの間で鬼ごっこをした思い出もあろう。

次に竹である。古来より松梅と並んで縁起がよいものとされて来た。そしてまた、藁に劣らず生活に密着していたと言える。昔の生活で欠くことのできない桶や樽。竹の特性である張力の強さを利用して籠かごとなる。竹を編んで作った箆ざるや畚ぶちは物入れとなる。そして、それ等を専門に作る桶屋、籠屋といった職業も生れた。家を建てても、土壁の中には小舞竹、

茅葺屋根を支えるのも竹である。しかも伐採の時期さえよければ先ず腐ることもない。また、直接日常生活に関係はないが武器にもなる。それは作るのも簡単なら使うのも簡単だからだろう。やくざ出入りに登場する竹槍も先の戦争で末期には軍事教練に大いに使用されたらしい。でも結果として、竹槍で米兵を倒したと

か、B29を突いて墜した話は一度も聞けなかった。

このことから考えると太古の時代からごく最近まで日常生活と深く拘り欠くことのできない貴重な存在であったと言える。生活様式も変り、人々から見向もされなくなったが、使い方によっては新しい使いみちもあるのではないだろうか。

先入観

井上健一

まず次の問題に挑戦してください。太郎君は1個100円の品物を、半値8掛け5割引で5個買った。なんぼ払うたか？

正解は 50円だ。
なぜ50円になるかを説明します。

1個100円の品物を半値だから50円。そして8掛け（素直に50円に8を掛けた）400円。

それを5割引ということは200円。それに素直に5を掛けたら1,000円。しかし1個100円の品物だから、1個

に100円が限度と言うことで、5倍すれば、500円になる。
つまりなにも値引きがなかったということだ。
この問題を40、60代の男女5人に出してみた。

全ての人が100円と答えた。

【半値8掛け5割引】と言う言葉を聴くと、一瞬に安いと思ひ込んでしまい、勝手に0.8をかけてしまうのが、人間の心理なのである。

最近横行している詐欺犯罪は、このように心理作戦の応用をしていることが多い。

もう一つの注意点はマスコミの過剰報道だ。犯人が捕まると、手口を細かく報道する。これをまねてより巧妙な手を使い、詐欺に手を染める者が出てくる。

対処方法は一人で判断せず、身内や近所の信用できる人に相談することだ。



老いのたわ言

吉政実夫

〈その一〉

人間とは向上心のかたまりです。今日より明日、明日より明後日と、今年より来年、再来年と、一寸でも豊かな生活に向上しようと夢を見ます。

私もそんな夢を見つつ、九十歳を過ぎた今、種を播き木を植えて、冥土の鬼の前に近々引き出されるの知らずに笑って日々を送っているのです。

医者や家族に見放された癌患者で

も、明日は助けの神が奇跡を起こしてくれるかもしれないと信じて病院の窓とにらめっこして生きているのです。

有名な二宮尊徳先生も「来年こそは、来年こそは…」と年はくれ、節のない経を繰り返し、「我が暮らしを教えたものでしょう。」

現在、社会は税制、年金、油、治安と一寸先も見えない暗い前途多難な時代です。

考えてみると、現代人には解らないランプと麦飯に始まった我が人生もあらゆる物が電化され、車は一家に二〜三台ある時代、他人より隣、隣より家族と、生活も上を上をと向いての日常生活で不満だらけの毎日です。

中国の諺に「足ることを知る人は常に楽しい」と教えていますが、考え方ではこの世は地獄にもなり極楽にもなることでしょう。

大きな夢でなく豊かな小さな向上心を、有難や有難やの気持ちで、余生を送るうではないですか。

今日も上山の小鳥は、我欲も曇さも寒さも関係なく清らかな声でかわるがわるに歌っており、しばし心とむひと時です。

く老いのたわ言を並べました。

〈その二〉

来年度NHKに坂本竜馬が登場するようですが、郷土の偉人安東鉄馬との関係は、義兄弟を結んで居たのではないかと思えます。京都霊山に安藤誠之助、安東鉄馬の墓が有り、二つの名前を使って鉄馬は各地に出むき書状を送り、竜馬の下働きをして居たのではないかと思えます。

現在、鉄馬研究者も亡くなり、偉人顕彰には文化協会の英知をお願いします。

美作市、放送局、新聞社に調査依頼陳情して実現に努力してほしいと思います。



生花 樽井 富美江

棋道部

詰碁

黒番です。黒一子をすぐにつぐのは失敗します。一手目が白の眼形を奪う好手です。

(二、三段の問題)

解答は25ページ

随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに

江碧鳥愈白
花欲燃
新水

書道 石川 倭子

二匹の猫

井口祥子

初春の頃だったか、親猫一匹と子猫三匹が我が家の近くに捨てられ、隣家の縁の下をめぐらとして住みつくようになった。

親猫は、母親だろうか、子猫とも全部黒色で、目だけが瑠璃色で、とてもかわいい猫である。しかし、我家では、子供の小さい頃、犬を飼ったことはあるが、猫を飼ったことがない。土足で部屋に上がるからいやなのである。だから、猫を見かけると、シーッと追い払うし、猫の方も姿を見ると、さっと縁の下に飛び込んで姿を隠してしまう。

餌は近所中を走り回って残飯をあさったり、畑の中の生き物をつかま

えて食べていた。そのうちに親猫と子猫一匹は、どこへ行ったのか姿が見えなくなり、二匹の子猫だけが身近な所でウロウロするようになった。

ある時、隣の欣也さんが「子猫もぐらを取ったよ。」と教えてくれた。そういえば、たくさんいたもぐらが最近減ってきたように思われる。今まで、いやに思っていた猫が、ちよつとかわいくなってきた。欣也さんと「猫の名前を何にしよう。」と相談し、二匹とも黒色をしているので、ククロと呼ぶことにした。そして餌やり場を決め、朝晩二回位餌をやることにした。習慣とは恐ろしいもの、餌をやるのはいつも私か、

隣の欣也さんだから、私が玄関の戸を開けると、さつと二匹が飛んで来て尻っぽを立てて私の方を振り向きながら餌場に向かう。私の歩むすぐ前を二匹が行くものだから踏みそうになり、歩きにくくてしょうがない。餌を与えると、まず一匹が頭をつつ込み、遅れてもう一匹が頭をつつ込む。すると、はじめ食べていた猫は、「ウ、ウ、ウ。」と言って、ほくのだぞ、取るな！と言っているみたいにする。猫にも性格があつて、餌にぱつと飛びつくと、用心深く間をおいて、おそるおそる餌を食べるのがいる。

二匹は暑い日は、日かげのコンクリートの犬走りに手足を伸ばしてぐつたりと寝そべっていたり、庭かげに姿を隠していたりする。

猫ぎらいの私も朝夕の餌やりをしている内にかわいさが増してきた。でもいやなこともある。朝起きて車庫の戸を開けると、そこに置いてある燃える物入れのごみ袋のごみが散乱しているではないか。さては魚くさい物をあさって子猫が引っ張り出

したのでとすぐわかったがおこつてもしようがない。また、我家ではつばめが車庫の蛍光灯のかさの所に毎年巣作りをしつばめの子を育てているが、子猫が近くを通るとけたたましく危険を知らせる。私もその声に蛇が来たのかと巣を見上げるが蛇ら

しい物が見えず、ほっとする。二匹の子猫はじゃれ合ったり、食べるのを競い合ったりしながら、たくましく大きくなっている。そして、今では、私の心の中に大きな存在になっている二匹の猫である。

おやくつさま

長瀬 加代子

「作東の文化」に、毎号エッセイを寄せておられる岡田千茶氏が、今年六月、「千茶悠悠」を出版された。本の内容は、氏の少年時代の追憶から青春の頃の淡い恋、川柳の句にまつわるエピソードなど多岐にわたっていて、実に面白い。

作品の中に描かれている風景は今

も変わりなく、読みながら、あの川、あの場所とすぐ思い浮べることができた。ただ一つ「おやくつさま」については初耳だった。

千茶氏は、次のように書いている。私の育った作東の家の隣の集落に、おやくつさまの、半間に二間の祭壇と八畳程の座敷のついたお

堂があった。毎年春先の縁日には、広くもない境内やお堂に通じる土埃のする参道に露店が並び、一日中近隣から参詣の人が続いた。境内の一角では直径一間位の釜で甘茶を煎じ、湯気を立てている甘茶を振舞った。私たち子供は甘茶と露店が目当てでお薬師さまにお参りした。

このおやくつさまは、大谷地区にある。千茶氏のご実家の前の杉坂橋

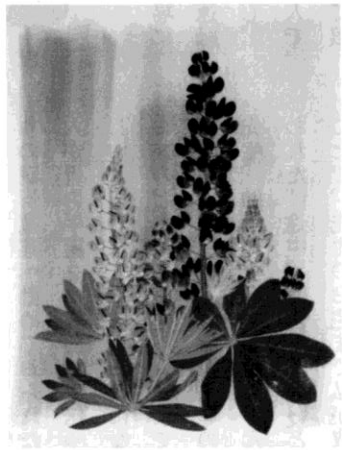
を渡った先が大谷地区で、大谷薬師堂は、その集落の一番上手の山裾に建っている。

大谷地区に住む日さんの話では、十五年前、地区の人たちが寄付をしてお堂を改修したとのこと。そして、毎年四月八日の縁日には、のほりを立て、地区の人が参詣しているそうだ。千茶氏の子どもの頃のような甘茶の接待はないが、縁日の行事は今も続いている。

猛暑の続く日のある朝、大谷薬師堂を訪ねた。お堂は瓦屋根で想像以上の立派なものである。中の祭壇には小さな仏像が安置され、座敷は四畳半位だろうか、それほど広くない。濃い緑の木立の陰に静かに建った薬師堂の境内に佇んでいると、ふいに、甘茶や露店で賑わった戦前の情

景が目に見えてきた。自分は見たこともないのに、千茶氏の子どもの頃にタイム・スリップした感じだ。当時の子どもには、縁日は本当に楽しかっただろう。

ぎりも頂いた。七十歳になっても、こうしたお接待は、子どものように嬉しいものだ。足王さまの縁日は毎年四月二十一日。お薬師さまや、足王権現さまを、遠い時代から守り続けてきた地区の人たちに、改めて頭が下がる思いです。



押花 有友 寿美恵

私の終戦

黒石貞子

昭和二十年、私は満鉄埠頭局の大連電信所に勤務していた。屋上の無線室に十六名、本社分室に十五名、総数九十余名で無線と電報を打っていた。重要ポストは男性だったが、次々と出征されて大半が女性の職場となった。隣りには暁部隊があり、暁と六九三部隊の電報も取扱っていた。爆風除けの壁ができて空襲があっても席を離れない私達を守る為と思ひ、日本が負けるとは思っていないかった。勤務明けで日勤の人等によって敗戦を知らされ、只茫然とするのみ。ソ連が参戦してからの電報の慌しさ……。暗号の解説はできないが胸底に予感のような一抹の不安

もなかったとは言えない。

八月二十三日週水子の飛行場にソ連軍が入って来たというので遠縁を頼って青雲台へ行った。しかし、その家の主人は関東軍の退役軍人で、若い軍人さんを三人も預っていて娘の子は預かれなと言われ、「もし日本人として恥かしめを受けるようなことがあったらこれを呑みなさい」と言つて、白い粉薬をもらった。どうしたものか迷っていた時、教習所で習った熊本県出身の先生が「子供が病気で家内も弱いので家の手伝をしてくれ」と言つて下さり、お世話になった。午前中は家のこと、午後は市場で茶売りや包子屋^{ゴオツ}へ手伝に行

ったりしていた。そのうち、一軒隣の満州電業へ勤めておられた御主人が胃の手術をするので手伝つてほしいと言われて手伝うことになった。戦後のどさくさで、病人の家での手術であった。執刀は旅順医専の吉浦先生、助手は日赤の看護婦さんで行われた。途中、縫合針がないということ、先生のお宅まで私が取りに行くことになった。外は黒暗。何かわからぬ怒号と鉄砲の音。旅順からのサーチライトが無気味に空を照らし、生きた心地はしなかったが、御主人のハンチングにレインコートを着て一目散に走ったことは、六十余年経った今でも忘れることはできない。

良くなられたかに見えた御主人は、栄養不良か亡くなられ、私は元通り

市場に行き、帰って夕方の家事をしていると、教習所の同期の友が、先生先生と玄関を叩くので何げなく聞けると、中国人四人とロシア人三人が付いて来ていた。驚いて裏の中二階のような窓から飛び降り、隣の小父さんに引上げてもらった。静かになつたので帰って見ると、自分だけ逃げたと大目玉を喰つた。身の廻り品もなくなつており、着たきり雀で、

あちこちで古着をもらつて寒さを凌いだ。

二十二年二月二十八日までに七回の転居をし職も変わり、敗戦と言う激動の坩堝の中に、決して還ることのできない貴重な時間と財産を捨てて来てしまった。二度と再び、戦争はしてはいけない。戦争のない平和な世界を念じて止まない。

胡瓜に教えられ

加藤美雪

自宅のすぐ上で上り坂を杖をついて登った処に三畝程の家庭菜園がある。植えものは玉葱、馬鈴薯、薩摩芋、白菜、大根、葱、人参、菠薐草、南瓜、西瓜、胡瓜、茄子、ピーマン、

ミニトマト、里芋、山芋、佛前の華等々、少しばかりですが挙げれば限りはありません。此の年(八十七歳)になつて始めて胡瓜に教られました。胡瓜の茎の誘引、芽止め、下葉の黄

葉取り等毎日のように行いますが、蔓をくくつたり、下の方に実つたのは早く取つた方が次のが大きくなります。初めまっすぐなスタイルの良いのがよい胡瓜に成ります。また、同じ処より雌花が二つ出るのがありますので一つは取つてやります。ある日、支柱の側で大きくなっていく胡瓜を見つけました。葉陰支柱で見えず、まっすぐで太さも付け根より同じ太さの何の欠点もない胡瓜には吃驚りました。今迄も見かけて居りましたが此の年になつてつくづく思われました。

環境と言うことは同じ瓜でも葉がつかえれば曲るし、下の方で土についた瓜も曲つたり下側が色が悪く、一本の茎よりできたものとは思われない差があることに今更のように感

歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなって

伝えよう



洋画 尾崎千代子

じるところがありました。そしてまた、四十年程前、胡瓜栽培を六畝余りして出荷していました頃を思い出しました。瓜が十五程程に伸びたら竹の節のない処を二十程程に切ってそれを真つ二つに割って自転車のチューブを細く輪切りにして竹を当てゴム輪をはめてまっすぐに一つ一つして居りました。

そうすれば瓜の等級も良く、曲つた瓜は雑として漬物の方へ安価に廻されていたことを思い出しました。

今の瓜は以前よりも長さも短い物になって太さも真中あたりが細くなっているように思われます。品種によるのでしよう。また、生食するのにもまっすぐな方が切り安く、きれいにでき上がります。料理店でもまっすぐのが期待されると思います。胡

瓜を作って今更のように自分の人生も此のようであったのかと思われ、野菜作りを何よりの楽しみとして足腰は痛くても頑張つてして居ります。畠には杖・横車（座つて作業をします）等あつちこつちに置いて転ばぬよう心掛けて居ります。今年は空梅雨で夕立もなく高温が続き、朝夕の畠への水やりにかかつて居りますが、



手芸 妹尾さと子

お蔭様で西瓜も思ったより大きなのが生りまして一家皆で苦勞も暑さも忘れ、舌鼓いたしました。

別所山幸福寺の考察

番能文郎

作東町史によれば幸福寺は元臨済宗、また禪宗と記載されているが、その資料が手元ないので、今回は白水史料、及び吉永町史、高野山教報を抜粋して、幸福寺について解明してみたいと思う。

平安末期の院政の頃、江見荘に美作八塔寺があり、白水、角南村は信徒であった。この八塔寺に高野山別所聖がやってきて猷身のな社会奉仕によって、八院六十四坊が完成したといわれている。史料によれば別所山かくふく寺は八塔寺の末寺とあり、八塔寺聖修験念仏僧によって、一院（中頭安養院）六坊が建立され、當時は八塔寺と深い関係にあったと想

像する。高頭寺の住職の説によれば

幸福寺がどこの寺の末寺であったかは、度々の火災や戦災にあり、寺院が焼失して資料がないので解らないといわれる。幸福寺の本尊はあみだ仏、堂の広さは五間四面と伝えられており、薬師堂は薬師如来、脇侍に日光、月光菩薩が配置されているが傷みが酷い。堂の広さは三間四面と記されている。その後、堂の破損もあつて施主人光庵によって安政四年九月修理再建された。別所には院の供御米を取扱う別納所があり、その維持管理や、幸福寺の建立にあつては、八塔寺と同様に莊園大名主、莊官職の平家の家来江見清平の援助

があつたものと推察される。鎌倉幕府の守護梶原景時が美作の国に入国し、八塔寺は源頼朝の御祈祷所となり四方一里寺領となつた。

幸福寺は高百石の寺領になつた。六坊の僧が申すには「御公儀より寺領百石を賜わつておりながら三昧がないのは如何なものかと申出あつて三昧取立に高野山へ銭拾貫持参し、高野山おくの院の寺内の土を取りよせ、別所にて米拾石投入し、ごうの札にて千部の経を誦誦し、三昧を行つた」と申し伝えられている。尚史料の一部に別処村別処山かく婦く寺とあり、この処の字について疑問を感じていたところ、高野山教報に真別処について記述されていたので、高野山の現地谷の入口に行つて見ると、拝観できない。真別処と看板が

出ていた。正しくは円通律寺である。鎌倉時代は新別所であつたが、その後「真別処」とされたとある。この教報によって別所を別処に変えた意味が理解された。それにしても処の

字を活用した、この史料は価値の高いものと感じる。これらの史料から判断して、別所（処）山幸福寺は高野山真言宗であつたと考えられる。

美作の山城を訪ねて

光井和彦

平成十九年六月に、身近に眺めている「三星城跡」を訪ねた。美作市明見にあり、標高二三三三mの主峰を中心として三つの山頂からなっている。三星城は宇喜多氏に攻められて落城した。麓の屋敷跡に後藤勝基の供養塔が残っている。

七月、津山市小原の「神楽尾城跡」に登った。標高三〇八mの神楽尾山頂にある本丸跡は、三六〇度パノラ

マ風景が繰り広げられ、すばらしかつた。その中に小房城跡もあつた。

九月、真庭市三崎―大庭の「篠向城（ささぶきじょう）跡」に登つた。標高四〇一mの笹向山頂に築かれた山城で、陸上通路（出雲街道）と河川通路（旭川）をおさえる要衝に位置している。城下の屋敷地名群や寺社に昔の名残りをとどめている。

十月、津山市加茂町山下から知和

にまたがる矢筈山（標高七五六m）に築かれた「矢筈城跡」に登つた。草苜衡継が築いた岡山県内で最大、全国でも指折りの高地にある山城である。非常に険しく、杖を頼りにやつと本丸跡へたどり着いた。築城以来一度も落城したことのない堅城だつたということを実感させられた。

平成二十年三月、津山市中北上の岩屋城跡（標高四八三m）に登つた。岩屋城は山名教清によって築かれ、その後、山名・赤松・浦上・尼子・宇喜多・毛利などが、約一五〇年間にわたって激しい攻防を繰り返した、美作国の軍事的拠点であつた。本丸の南に砦、西に小分城、東に十二本の堅堀りを設けた、険しく大きな城であつた。

四月、津山市宮部下の田邊城跡(標高二三・一m)に花見をかねて登った。城主の子孫の田邊九吾さんが登山道整備・案内板設置・桜や山つつじ植樹・慰霊碑建立などされており、桜

がきれいに咲いていた。西に直径7mの井戸があり、大きいのに驚いた。美作の山城を訪ね、それぞれの城跡の違いを知り、戦国時代の攻防の歴史を偲ぶことができた。

古代への空想・夢を誘う

「見」と「波」字入り地名のことなど
ちよつと勘定・分析・吟味を試みる

加藤 芳英

「江見」は、山家川が吉野川に注ぐデルタとして発達。「エ(江)」とは一般に陸地に入り込んだ水辺をいう。「ミ(見)はあたり周辺のこと」と説明されている(丹羽基二著「続・難解姓氏地名大事典」)。

「脆いて視るを見る」という。対者に向つて靈的な交渉を持つことを意味する」と白川靜著「新訂字統」は説明。「見」は、対者・対象物と契り

を交したり、集団の結(ゆい)による開発拠点にしたりすること。(発見の喜び)

西粟倉の志戸坂トンネルを過ぎると樽見、尾見あり。津山市に物見、倉見、吉見、伏見あり。新見市、落合の古見あり。山陰に目をやると石見国、大山の辺りに夜見ヶ浜、会見郡などがあり、鳥取市に喜見山(摩尼山)ありだ。小生は人文社発行「新

版日本分県地名総覧』で、「見」字入り地名をチェック勘定してみた。中国五県の合計総数は一四二か所。(東側の兵庫県のみで五一か所もあった。)

岡山三〇、鳥取三六、島根二一、広島二二、山口県三三か所であった。鳥取は岡山に較べて「見」の地名が単位面積当り約二・五倍の高密度でみられた。同様に兵庫県は岡山の約二倍の高密度で「見」の付く地名が存在していた。(現在の地名は全て古代からあったと限らぬが、傾向はわかるだろう)

津山市「阿波」は加茂川の上流にあり。中国山脈の鳥取県側には「波」字入りの地名が多くある。千代川上流に、口字波↓宇波。口波多↓波多。江波口↓江波という集落地名あり。

阿波温泉のある大畑(オオバタケ)

地区地名は、山陰側から移動してきた秦(波多)と関係がありそうだ。勿論、瀬戸内↓吉井川↓加茂川遡上の海部や和氣氏や秦人であったかも知れぬ。

奥津↓上齋原↓加谷(加谷川)↓穴鴨(天神川)↓小鴨↓大鴨という地名が連なっている。岡山の久米郡の北側に、鳥取の久米郡も連なっている。

應神天皇の頃(二八三年)、弓月君が朝鮮より一二七県の民(約一万八六七〇人)を連れて帰化した。筑前・宇佐に秦王国形成。

山城開発・広隆寺で有名な秦河勝は、聖徳太子の死後、蘇我入鹿の妃を避け、千種川の河口から「ミニ秦王国」を形成。当地「大避神社」(祭

神は河勝や秦一族の王サルタヒコ等)があり、赤穂、佐用、揖保郡に三十余の分祀社が存在。美作市宮原に「天曳神社」(推古天皇の時代、祭神サルタヒコ)が存在することは、播州から作州にかけて秦人(勝部)が多数定着していたことを物語るのではないか。

美作は、スサノオ・大国主の領域で、新羅との交流、秦(勝部)、加茂(鴨)等の渡来人が多かった。(勝田は勝部からきているのかも)

古代史の空白を埋めるための手掛かりとして、「見」「海」「豊」「吉」「勝」「金」「福」「倉」等の字の入った地名を、特に東美作地方地名を本格調査したい。「白猪屯倉」(吉備五郡に設置)で有名な大庭・久米の蘇我の基地研究、「いるか峠・高原」(北

房)の探求、武内宿彌(蘇我の祖)や山陰との連なり、八幡神社祭神の應神天皇の政権、海部の黒姫と仁徳天皇の恋(山方は数か所以上名乗りをあげている)、大和政権の鬼ノ城侵攻、財田氏と英多郡家の真相など解明すべきが多々である。御指導よろしく。



短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力



日本画 寺師喜代美

詩

獅子舞の里

田中清一

鎮守の森に 神輿が戻りや
若い衆みんなで 神楽舞う
おまや鼻高、わしや獅子頭
刀かざして 悪魔斬り
男根磨いて リートロロ リートロロ
それ、娘泣かせの 太刀姿

作州山家に せがれが戻りや
若い衆あふれて 獅子を舞う
お爺ん笛吹きや、お父うがまわす
僕あ七つで 花の笠
肩に立って リートロロ リートロロ
それ、松明もえろ 晴れ姿

伊勢のナーエ ようだで
吹いたる笛は ソレサ ソレサ
聞こえますぞえ コーリヤ
宮川へ ヨーホイ ヨーホイ
ヨホイトセー (伊勢節より)

伊勢から使いか 猿舞い戻りや
若い衆呼びよせ 爺も舞う
君やあひよつとこ、あんたお多福で
おらあ七十で 練り獅子を
昔鳴らした リートロロ リートロロ
それ、つづく若い衆の 艶姿

老兵の叫び

早春の夢は破れて老兵の
 つらい病とさだめに負けて
 男人生すててはみたが
 まてしばし
 白衣の天使にさとされて
 またも希望がよみがえり
 男子たる者七転八起

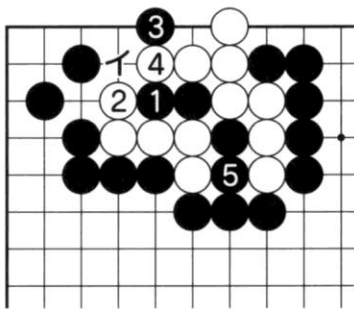
早水春男



押絵 小林 艶子

詰碁 解答

黒1と二子にするのが好手。白2に黒3から5で白死です。黒1で5は白3で白生き。また黒1で3は白5、黒1、白4、黒2、白イで殺せません。



俳句



写真 長瀬 昌一

初暦

幼より同じ柱に初暦
 齒切れよく話す美人や鳳仙花
 草むしり本気になりし雨上がり
 指先で弾く西瓜の熟れ加減
 替へ歌に変はって更ける盆踊

春名 静山

迷い蝶

天窓や冴えし寒月のぞきたり
 春雷に花鉢転がし猫走る
 花冷や十三回忌夫の墓
 散歩道栗の実二つ落ちて来し
 秋暑し十一月の迷い蝶

杉本 幸子 (土居)

テレビの篤姫を見て

江見英雄

篤姫の苦勞を知りて泣かさるる
深海の水を飲めども暑は去らず
我が最後どなたの世話になることか
産土うぶまの神の恵みの有難く
再びは得られぬ命大切に

なれるなら

田中清一

時超えし聖地に入れば寒いちご
行く雲に菜花に里の慕はしく
滝しぶき浴びて白ます花わさび
名月に負けぬ笑顔や肩ぐるま
爽やかな風になるならなれるなら

雨蛙

坂部金治

水車小屋飛末散らして月淡く
小雨道ライトに踊る雨蛙
自然界峰渡り行く秋の風
鯉幟風満々と峰高く
遠花火音のみ響く古い住まい

春風

山本登山

春風が旅へ誘ひの戸を叩く
酒の匂ひ包み仕舞ひし花筵
秋暑し一片の雲動かざり
軒下に振ぢり大根細りけり
旅衣脱げば夜寒の迫り来る

友迎ふ

宿野淑子

雪の中八十路半ばの友来る
花吹雪乙女の頬を染めにけり
教へ子と肩を並べて花見かな
五月晴れさつき盆栽友迎ふ
日だまりに親猫子猫たはむれて

春雷

小玉安子

春雷の音に目覚めて足袋を穿く
梅林をこの目に見たくてバスの中
たんぽぽの綿毛にのりて飛行せり
高い山狭い空にも春の風

白鳥来たる

山下照夫

此の僻地よくぞ選びて白鳥しらとりは来ぬ
寒き川三羽寄り添い日向ほこ
三羽目は幼鳥なりや灰色ぞ
震える手無我の夢中でシャッター押し
来年も忘れず此処に翔んで来て

誕生日

加藤美雪

山櫻紺碧の中白く浮き
寺の坂登りて山門さつき見ゆ
青山を眼下に老等らうら出雲へと
梅雨期老い痛み忘れてボーリング
文月を生きる喜び誕生日

一盛りの蜜柑

井口 秀子

螢こい幼きころの夢を呼ぶ
母と子の一盛のみかん買いもどる
水満ちて早苗が笑う田が笑う
柚子みそのアンコールが来た柚子も来た
何時の日か形身となるや夏帽子

時鳥

春名 波留夫

新緑や水に映した角隠し
時鳥少し遅れて寺の鐘
幼子の前垂れ取れて柚子は黄に
ふんぎりをつけて床蹴る霜の朝
獵犬の鈴の音らし野末より

四季折折

山本 靖子

土筆和へ夫婦の膳の四十年
遊ぶ子の手のひら小さし春の土
水疾くと流れて岸に夏の草
芒の穂風に吹かれて今日を生き
いろり焚く家伝の自在かぎありて

赤とんぼ

樽井 清江

五月雨の空を見つめて地の動き
鳴くさまを見ることもなく時鳥
朝顔の咲くを待たれる子の日記
親竹の背丈を超える今年竹
赤とんぼ群をはずれて竿の先

よもぎ

井口 祥子

部屋中に陽光梅が香招き入れ
夢語る慣れにし岸辺よもぎ摘む
暮れなずむ河辺を灯す菜の花や
一念をつらぬき通すかほととぎす
一山を匂と色で栗の花

農一筋

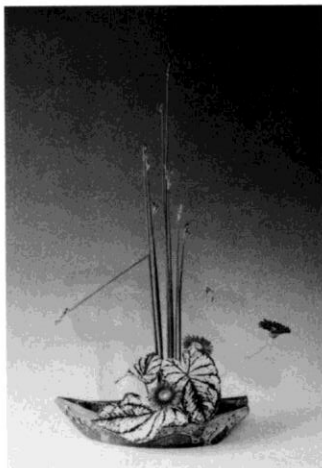
青山 元江

農一筋男の固き注連飾り
ちぐはぐな話の弾む春炬燵
野に立てば野菜のうめき喜雨を待ち
退屈と言へる贅沢日脚伸ぶ
耐ふべしと母の教へや終戦日

四季の詠

青山 美和子

菜の花の荒野に一本ありにけり
打水の乙女の手縫ぎこちなく
頭たれ祝詞に感謝 秋祭り
燃えさかるとんどの炎天を抜く
淡雪の舞ひ下りてくる昼下が



生花 加藤 玲子

折折に

釜田玉枝

梅満開老母に観せたく車椅子
野良やすみ懐に入る風涼し
姫新線列車すれすれ合歓の咲く
宇宙よりメッセーじらし螢点滅
我が山の谷水汲みて墓洗う

我であり

坂井はつ子

考えた嘘も使えず四月馬鹿
曲りなりに醍醐桜へ真つすぐと
青き踏む白スニーカー染りけり
カーネーション如きに喜ぶ我であり
びつしりと茅花ほうけし土手をゆく

霊界の歩み

江見英雄

成佛か否かの判器我にあり
死と共に霊界入りを思い出せ
霊界の掃除が一番大切だ
世に処する万余の事典ありつれど
何事も反面のあり今ぞ知る

敬老会

春名静山

井の中の蛙と山の奥暮し
祝はれて寂しさひそむ敬老会
千本の桜自慢の城下町
明日へと今日の元気を抱いて寝る
いい湯だな山のお猿も露天風呂

川柳



書道 田代秀山

五輪へ夢を

山下照夫

勉強をせかせせ父親殺される
天災はえこひいきなしに何処迄も
高齢者死ぬより他に道は無し
我が身持ち北に棄てよはエゴイズム
憂き世故せめて五輪に夢托し

聞く

山本千恵

産室に日本を背おう声を聞く
話より聞くことこそが難しい
聞く耳をもたぬといえど気にかかり
聞くことの出来るわが身に感謝もし
福の鳥のかすかに聞けよ福の鳥

懐古

新免三代

まん中に母がいました思いやり
母の背に丸味せつなきドラマ負う
孫抱けて祖母の一分晴れがまし
悲しいと二人はむこう見て話す
良いと聞き皮ごと食べた葡萄の実

想い出

遠藤 榮

萩初めて亡母の背中見え隠れ
幼友逢えば高なる胸鼓動
想い出を歌えば何時か童心に
姉いもと峠越え行く茜雲
手を振って母は小さく曲り角

すれちがい

名部 みどり

わかるなら内緒でおしえて検査技師
ほんとうにドラマですねと胸うたれ
いい返事してはいるけど早合点
おこらせないでたのむ血圧上るから
おしゃべりの内容みんなすれちがい

手

太田 智子

手には手の約束あるやままならぬ
草むしり日焼けした手に陽が落ちる
匙加減手加減下手な犬張子
喜寿の手と行く先ぎきの話する
手はほどほどに頭を使えと言った亡夫

老いる日々

名部 和子

かけ声をかけねば立てぬ足となる
前向きに気ばかりあせる古稀なかば
年きかれ忘れましたと言いかえす
結ばれた短冊にある無理なこと
結んだ糸見せあう仲でながつづき

山

山本 昌子

山ざると言われた子等は山を捨て
山あいの浅瀬で競う釣り仲間
月の叱咤受けつつ強く山で生き
山幾つ越えたか寡婦の丸い背せま
我儘な心を溶かす秋の山

宵の月

山本 登山

妻の留守のめば煮干の目が光る
宝物戦火をくぐった印一つ
縄暖簾出れば見て居る宵の月
正直に言えば小遣い減らされる
負けても良い暑さ凌ぎのパチンコ屋

本音

衣笠 隼巳

この場面本音を言えば水を差す
置いた場所忘れ戸惑う駐車場
お仕事がお医者通いと言う返事
値段よりどこの産地か先に見る
引き受けた二つ返事が邪魔をする

短歌



ちぎり絵 名部竹夫

どうなる

坂井 はつ子

意識して息する我かここ二日深呼吸が出来かねて
るつ

喘鳴が乱るのみぞ高ぶるなテレビに向ひ怒って
どうなる

背中搔く「孫の手」一本手に馴染み消しゴムを寄
すりモコンを寄す

芽

加藤 幸子

雪解けし敷藁のうへ手探りぬチューリップの芽が
出てゐる出てゐる

雪の下に角ぐみゐたるチューリップその先鋭く掌
に刺さるほど

ひと日とも言へぬ地中の温もりかチューリップの
芽早ほぐれるつ

湯立てて神事

春名 静山

満月の光浴びつつ宵宮の湯立てて神事の釜たぎりを
り
新聞のおくやみ欄に目をやれば己が齢を前後して
載る
新聞にテレビにカタカナ語の溢れ英語習はぬ老い
を悩ます

心して読む

江見 英雄

周防なる石城の山に修業して御法道術^{ごほうどうじゆつ}数多を受
くる
八十年^{やそとせ}の昔習いし藤村の詩集を今に心して読む
秋葉原魔の人達にあはぬ様怪我除け守りサムハラ
書きて頒つ

独り居

岩本 敏子

舅より譲り受けたる鋤鉞は納屋の片辺に寄りそふ
ごとく

独り居の夕餉に添ふる一品の落の臺みそほろ苦き
かな

漸くに色付きそめたる無花果を鴉が狙ふ独り居の
庭

「中華」の国どう変わるか

加藤 芳英

「中共」のチベット・ウイグル併呑は「満洲」超
ゆる暴力侵略

「思いやり」「助けあい」説くダライ・ラマ「非
暴力」こそ世界をうごかす

どううごく「中華」の国の人民よ抑圧嫌ひ自由と
平和へ

桜咲く

山下 照夫

彼岸前共に老いたる嫁二人仲睦まじく墓の掃除を
めったに見ぬ殿様蛙あはれにも耕運機の爪の犠牲
となりぬ
浪人し苦節の孫に桜咲き願望久しきスタートに着
く

山桜

山下 三代子

行く春を惜しむが如き山桜ひとひらふたひら今日
を散り果つ
こはくてう親子三羽で泳ぐ見ゆ大川井堰に越冬せ
るかや
ドドツと言ふ屋上の音に目覚めたり積りし雪の解
け落つる音か

蟬

杉本 幸子(土居)

梅雨明けを待てずに蟬が納屋の前柿の木で鳴く遠
慮しながら
大橋の車上より見ゆる瀬戸の海を金色こんじよに染め夕日
落ちゆく
名も知らぬ鳥の水辺に遊びきて心癒やさる日が沈
む頃

野良猫

坂部 金治

山桜碑文に残る城の跡眼下に伸びし集落の影
野良猫も老婆の話判るのか杖突く婆ばんに寄り添
う散歩
山波の果てに光りし天文台峰吹く風に胡座かき居
り

春

井上 さかゑ

耕せば冬泥春泥まじりあひ目覚めしか畑は湯煙り
を上く
豌豆の花の白きに白き蝶止るにひらひら発つにひ
らひら
肥沃土の産みし甘さが喉にしむ丸ごと食みをる真
赤きトマト

房総の海

安西 苑

波佐間島に当りて碎くる荒波の真白き飛沫滝のご
と落つ
妹の送りくれたる新物の若布は潮の香りを包むか
白波が寄せては騒ぐ館山のあの堤防にもう一度立
ちたし

わが村

名部 みどり

山の上に祠建ちある音高く厨には赤飯の湯気立ち
のぼる
持ち寄りし食材土の香りして神祀る今日村は一つ
に
信号なく人影もなき緑陰を一人うきうき行くふる
里の道

剛と散歩

藤本 伸子

じゃれながら我をみつむる犬剛の素振りかはいや
尾の裏白く
心から癒やしてくる犬剛よ獣の身にも優しき
目と脚
好き嫌ひ口では言へぬ犬なれど甘ゆる声にて迎へ
て呉れたり

平和日本

横林 富砂子

稲田には電柵張りてけものよけの設備はすれども
きびしき現場
小春日よ小豆をこなすに好き日なり槌を振りつつ
心地よき汗
夜の空に打上花火は輪をえがき火花を散らす平和
日本

童らと

池田 保子

三名の新入生を祝はむと地区民数多集ふ入学式
青空に身を躍らせて鯉幟悠悠およくや美咲の里に
童らと隠れん坊に興ずれば良かんさまに我は化り
ゆく

初燕

原 幸子

初燕声聞きてより苗仕度良き苗作るを老いても楽
しむ
早苗田に五羽の白鷺舞ひ降りぬ華麗なれども憎さ
も有りぬ
朝まだき時鳥の声に夢さめて入院しし夫安じ眠れ
ず

折りにふれ

荒尾 登志ゑ

体育祭心うきうき来しものの児童多きに我が孫見
えず
満開の桜の下は人の波頭上にみるは備中櫓
能登香の湯人情豊かで温もりて会話もはづみて今
宵すぎゆく

折折に

鳥形 節子

過ぐる年笑ひし泣きしも夢のごと来む年こそは平
和なれかし
朝まだき鶯の声透りきて我をはげます心のささへ
と
光さし色とりどりの花花に春らんまんの能登香の
里よ

折折に

森本 久子

足もとの小さき影はこの花かはなれてみれば影も
うごきぬ
ふくらめる蕾にいつしか和みみて身を大切に咲く
日を待ちたし
わが家でも村でも田植がはじまれば我的话は空耳
できくか

春

光井 房子

岸一面に競ひて咲きし蒲公英も綿毛となりて吹く
風を待つ
百年を経りても咲きし紅梅に祖を偲ぶも梅月夜に
して
川岸の満開の桜に風立ちて雪のごとくに水面に散
りゆく

をさなご

名部 和子

散歩みちピアノのメロディー流れきてなつかしく
聞く女孫を想ひて
幼児がバスから順に降りてくる最後の一段みなジ
ヤンプして
幼児の逆立ちすればにこにこ足裏にも顔ある
ごとし

日捲り

清田 三智子

曾孫の声山にひびきて静かなる谷間は祭りよ我も
祭りよ
幻影をみぬ日はなかり若くして逝きにし夫よ巡る
思ひよ
日捲りをめくる度ごとこの私の心の糧とも叱咤と
もなる

孫

内藤 慶子

帰るなり洗面台で手を洗ふ三歳児の手泡立ちの中
バレンタインデーのチョコを届けに日の暮れを小
学生の孫の友来ぬ
懐しき思ひ出胸に晴れて今六年間の学舎後にす

をりをりに

加百 由起子

娘われの世話になれるが幸せと母は高く高くぼん
ざいをする
木苺の数多うれたる実を一つふふめば甘く戻る幼
日
災ひも病魔も退けと神官の打ち鳴らす太鼓が宮に
轟く

生ありて

横山 昌子

茅萱の穂光りて風に揺れてをり水を見回るわが足
もとに
生ありて今年も背負ふ草刈機薫風ほほに心地よき
かな
仕事を終へ充ちゐる我に安らげき思ひの如き月昇
り来ぬ

元氣

大内 佐智

我が部屋に鎮座ましますカーネーション元氣であ
るねと声が聞こゆる
雨降りて紫陽花の色香極まりたりジュンブライド
の輝きの如くに
人として生くるすべ知る友ありき我が友にして我
が師となりぬ

紅引きて来ぬ

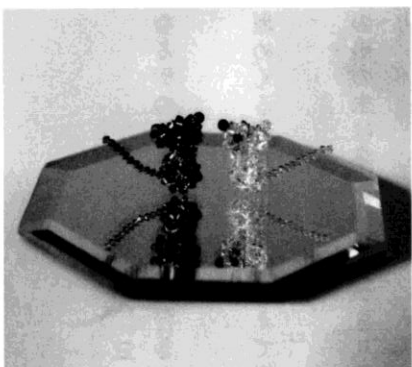
梅澤 ヒデ子

来し方の文才なきをおしのけて三十一文字に思ひ
めぐらす
降る雨に蓑笠まとひて早苗とり背中濡れるし過去
は遠のく
老我が唯一待ちゐるしご詠歌の寺の集ひに紅引き
て来ぬ

笑顔を信じて

横山 美恵子

採血も二回終りて刻々と二十三日の手術日迫る
午前十時手術室へと入りゆきぬ担当医師の笑顔を
信じて
同室の手術仲間は同年代痛さ忘れて戦後を語る



子満子 暁す 坂本 西岸 手芸

生き甲斐

小林増代

もう駄目だこれが最後と思ひつつ拙き歌を記しゐるなり

足悪く歩行困難となりし今とほとほと花見るそれが生き甲斐

我にまだ生くる望みをくるるかや木の花野辺の草の花

鳥もいろいろ

宿野和穂

お呼ばれか「登代さん」家の桜んぼ軒端に種を播く鴨よ

住みつきし鳩を追ひやり網張れば屋根より吾は見張られてをり

裸木の櫓の大樹の鳥の巣にかはいかはいと鳴く声悲し

朝影

新免三代

ふか緑の大きいなる樹の濃き影に吸はれ行きたり我の五体は

山間の深きを埋めくる朝霧に播磨は消えて嶺三つ浮かぶ

身を抜けて日の出の朱は窪の端にくつきり我が影焼きつけぬたり

神仏

原田順子

悪霊は寄せ付けまいぞと神官の叩く太鼓が腹に沁み入る

大茅の輪八の字にこぐる夏祭り払うてもらひて無病息災

「大聖寺」大般若経の経風に僧侶らの声本堂ゆさ振る

逝きにし兄へ

有元理嘉子

旅立ちの近きを思ひてゐる兄に慰むる言葉の見つからぬまま

無器用で寂しがりやの兄なれば母を捜してさまよひるるやも

老松の間よりさし来る天つ日に兄の墓石温りきたりぬ

山家川

新田千晶

山家川の水澄む底には鮠の群れ土手には菫の花咲く帯よ

裸木の隙間の空の青までも水面に映して見する山家川

水嵩を増して濁れる山家川今朝の流れに魚影は見えざり

瀬戸の海

梅本信恵

夕映えの瀬戸大橋を渡り行く乗用車の列は影絵のごとし

瀬戸内の海くらぐらと揺れをれど昇る朝日が波間を照らすか

瀬戸の海に白き船足引きずりて今日も漁船が沖へ出で行く

みんな同胞

釜田玉枝

白き腹見せて燕の宙がへり過疎の軒根に巣造り始まる

テレビにて青い地球を眺むれば境界線なくみんな同胞

両の掌を乳房に置けば我が鼓動明日は検診予約の日なり

山つつじ

小林 洋子

山つつじ淡き緑葉日に異にも色深め来ぬ春べの山
は
黄昏に一羽の鴉杜に消え遠住む女孫思ひつつをり
降る雨に椿の葉の上の雨蛙生き生きとして獲物待
つらむ

罪人の如く

江見 眞智子

寒空に肩をすはめて煙草をば喫ふ人ありぬ罪人の
如く
をつとへの罵詈をば言はむとせし時を鐘が鳴るな
り夕べの鐘が
独り居はかくも穩しきものなるか三十時間の夫の
居ぬ間よ

青年

橋本 巴子

漂ひ来しソースの香りに誘はれてテントを覗けば
好青年をり
青年と鉄板一枚の距離にして息を感じつつ焼き上
がるを待つ
肉たっぷり野菜たっぷりの焼きそばをオーラ良ろ
しき青年が仕上ぐ

窓

福島 美智子

窓といふ窓を全部開け放ち風鈴吊せば夏を鳴らし
ぬ
なだらかに山の稜線色増すを窓から切り取る四角
い風景
つながれてぶっくり太った猫が居るばらの花咲く
花屋の店先

三姉妹

船曳 文子

亡き兄の戦跡巡る三姉妹赤きデイゴの花揺るる島
佐渡ヶ島へ終りの旅とて三姉妹齡合はせて二百四
十歳
三姉妹梅酒たしなみほろ酔ひてそれぞれの夫を語
りて明けぬ

父の面顔つ

新免 初子

米俵六十キロ入りを作りにし父の面顔つ出荷の時
季は
米俵の品評会にて一等に選ばれしは父の作りし俵
キャップ付けちびとなるまで使ひにしあのえんぴ
つよあの戦時下を

友よりの文

北村 和子

湯が湧いた飯が炊けたぞ乾燥出来たそれぞれ奏で
る厨のメロデー
患ひて癒えて患ひまた癒えて今日梅雨明けの青空
を見る

わが夫の造りし庭に毎日を慰めらると友よりの
文

老の空耳

黒石 貞子

三回忌すぎれば迎へに来てよとは言ふには言ふた
がも少し生きたし
雨風の乱るる音も人の来る音とも惑ふ老の空耳

只でさへ貯へ少なきわが脳に泥棒入り来て呆とな
りゆく

娘の電話

黒石 登代

しばらくを便りなき娘の電話なりわが声はづめば
娘は安堵なす

靴音と吐く息ひびく娘の電話夜の七時を帰路と告
げつつ

「十分に水分摂ってねお母さん」いつもの台詞で
電話が切れる

今年も生きて

森本 かよ子

夜の更けを男孫の部屋は明かるかり進学受験の課
題もあるや

チェンソーを持ちたる村人集ひたりクリーン作戦
いよいよ開始す

友だちとの旅のメインは鞆の浦その名も高き潮待
ちの港

われが今知る

阿部 すみゑ

寝たきりの母を三年看取りし吾看取られて知る哀
しみ更なり

病みてより厨を任す身軽るさよ伝へ置きたき仕来
りあれど

菖蒲湯の香りなつかし長湯して母在りし日の甦り
来ぬ

朝のしじまに

中川 富美枝

目の前に青鷺ゆたりと飛び来たり我と向き合ふ朝
のしじまに

芋の葉の露のいくつを遊ばすれば輝く大き一粒と
なる

学校のチャイムが時折訝して霧がやうやく晴れて
ゆく村

瀬戸大橋

長澤 和枝

幾十万の人の願ひの叶ひにし瀬戸大橋よ白く耀ふ

科学の粋匠の技術よ二十年燦然とあり瀬戸の大橋

喜戯とせる徒歩の人波つづくなり差す日も祝ふか
瀬戸大橋を

近況

末宗 千歳

朝あさに咲きつくあぢさゐの色深み小さき蕾も露
を持ちをり

吾を呼ぶ弾みたる声にさそはれて毛物の道に「ま
たね」とコールす

「筋とれ」のリーダーは吾を笑ひ見る腰をかがめ
て手まごを負へば

幼日

加藤 保子

山鳩が鳴けば幼日よみがへる日暮れの畑に母を待
つとき

六月の青田の間に舞ひてゐる螢を見ればふるさと
遠し

秋茜青田の上を群れてをりそば蒔きとんぼと呼び
し幼日

私の生き甲斐

角南 三津糸

奥深き我が師の歌集読みをりぬ友と余生を学びぬ
る我

合唱祭文化祭にと追はれつつ転調重ね秋こぼれゆ
く

合唱も短歌も良き師に恵まれて未だはてしなき我
の生き甲斐

ふるさとの川

角 利津

川の辺に幾世を經りし常夜灯来し方すべて水に流して

ストレスを流しに行かむふるさとへそこには昭和の風が吹くゆゑ

濁流の時を經につつ澄みゆくに似て美しく老いてゆきたし

音符のすずめ

徳野 富美子

舞ふもみぢ散りし紅葉と戯れて幼ら帰るランドセル揺らし

試飲終へなんきんはぜの色づきと変はらぬ顔の翁の笑顔

五線紙に次々音符を入れるごと雀が並ぶ電線の上

ふうせんかづら

入 矢 敏 江

煮えきらぬことは今にも降りさうで降らぬ夕立ゆふすげが咲く

「あれだけのもん」と言はれて聞かぬふりわたしは私とふうせんかづら

一言の重さを思ふ鮎色の紅茶に落したミルクのもやう

例へば

日 下 智加枝

父さんも母さんも夢にも言はず赤い鼻緒の草履の軽さ

ほんたうのことを言はれただけなのに萎れてしまったブルーのセージ

近づけば見えなくなってしまうもの例へば那岐山・男また女

吉事祝ひて

浜 田 くに子

新しき年の集ひに絶ゆるなく雪は降るなり吉事祝ひて

美しき調べにのりて朗朗とわが歌流るる「新春のつどい」

花束の数本仏に供へよと父が言ふなりいつものごとく

達 観

川 崎 晃

書齋にて紅の椿に口づけし精気生まれこの日はじまる

山茶花は作意もてらひも何もなく自然美がおのづとわが目に入る

見失へば探すことなく落ちつきてあらはれるのを待つが賢明

木末は高し

三 浦 智江子

天霧らひうづをまきつつ舞ひ上る雪に籠ればおもかげが立つ

雪晴れの濃き藍色の朝の空木末の雪がかがやきて散る

頭文字を幹に彫られし朴の木や触れて仰げば木末は高し

息嘯の霧

関 内 惇

去年咲きし位置も高さも違へずに山桜咲く母校は閉づるに

三遷の訓を継ぎ来し学舎に我ら励みきひたすらなりき

廃校となりし母校は深ぶかと鎖されゆくなり息嘯の霧に

作東文化協会 グループ紹介

部名		団体名	種別	代表者名	指導者名	例会	場所	展示会等	作東文化協会会員数		
									協会員	協会員以外	地域外協会員
書道部	1	白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	作東公民館 里見先生宅	9月に白雲書道会展	31人	人	11人
	2	阿部書道会	書道	山本章	阿部雲魚	月2回	岡山市伊島町雲魚宅	県北展等	8		
絵画部	3	作東水彩画教室	水彩画	田中佳栄子	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	毎年5月に神戸・明石・作東交流展	15		4
	4	作東油彩画教室	油彩画	妹尾美智子	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展	18		4
	5	さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	作東公民館	毎年2月に予定	9		
	6	墨絵教室	墨絵	小林艶子	岩本敏子	月2回	J A勝英作東支店土居営業所	プラザ・土居小学校	7		1
	7	彩の会	絵手紙	木南節子		月1回	作東公民館	郵便局(吉野・粟井・土居)、きんちやい館	8		
	8	すみれ会(絵手紙教室)	絵手紙	谷口翠	岩本敏子	月1回	岩本先生宅	土居小学校、プラザ	11		2
	9	吉野ハビネス(絵手紙)	絵手紙	横山富姫	竹内まり子	月1回	吉野公民館	美作市東吉田の宝妙寺の青葉祭の書画展に展示	7	2	2
園芸部	10	園芸部(山野草)	山野草	加百よし子		年13回	作東吉野きんちやい館	7/4~7/6 県北山野草展(山の駅) 10/11~10/12 吉野地区文化展(私のすきな一富展)(きんちやい館) H21.3下旬/H21.5下旬 全国緑化フェア岡山大会に協賛展示予定	18		6
	11	園芸部(盆栽)	盆栽	青山巖		年8回	青山宅	(勝英)ファーマーズ	8	4	2
茶華道部	12	ひまわりの会	華道	中田敏子	長家清甫	月2回	作東公民館	月2回 公民館玄関に生花を展示	14		
	13	長家社中	茶道	谷本津多江	長家宗春	月2回と月3回	作東公民館と長家宅	9/14 お月見茶会、作東公民館	10		
	14	お花を楽しむ会	華道	香山秀子	杉本幸子	月1回	福山公民館		9		
文芸部	15	英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東公民館	プラザ展示2回、新聞発表(毎月)	24	1	8
	16	能登香短歌会	短歌	名部みどり	関内惇	月1回	作東老人福祉センター	プラザ展示2回、新聞発表(毎月)	16	2	
	17	吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	旧吉野小学校	吉野支部文化展・プラザ展示2回、新聞発表(毎月)	16		4
	18	山家川俳句会	俳句	山本登	小島宇人	月1回	福山地区福祉センター	新聞発表(毎月)	14		
	19	作東川柳同好会	川柳	山本章	岡田千茶	年12回	作東総合支所	新聞発表(年6回)	13		
	20	Labo子ども英語	国際交流	原田郁子	原田郁子	月4回	旧吉野幼稚園(さくら組)	2008年7月21日(月)(祝)午後 作東バレンタインプラザ5周年発表会	16 (内子供8)	16	
歴史部	21	歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	固定した指導者は、なし。地域の高齢者又は郷土史家	月1回	作東公民館ほか地域の集会所	現地研修	18		1
	22	古文書を読む会Ⅰ	古文書	山本章	安東靖雄	月1回	作東総合支所会議室	研修視察	13		2
	23	古文書を読む会Ⅱ	古文書	山本進一郎	安東靖雄	月1回	作東総合支所会議室	研修視察	10		3

作 東 文 化 協 会 グ ル ー プ 紹 介

部 名	団 体 名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会 会員数		
								協会員	協会員 以外	地域外 協会員
写 真 部	24 写 友	写 真	小坂田 貢	小 玉 司	年 8 回	野外撮影会・技術研修会	プラザ展示	15人	人	1人
芸 能 部	25 吉野ハピネス	大正琴	小 林 範 子	富 永 仁 美	月 2 回	吉野公民館		13		1
	26 琴伝流大正琴あずさの会	大正琴	岩 本 敏 子	藤 谷 守	月 1 回	J A 勝英本店	各地演奏会出演	11		5
	27 作東友久琴楽会	大正琴	岩 本 敏 子		月 2 回	J A 勝英作東支店 山城集会所 J A 勝英栗井支店 栗井教育集会所	J A 勝英女性部発表会	27		
	28 早瀬流剣詩舞道	剣 舞 扇 舞	石 川 八 千 代	安 原 鯉 舟	月 6 回	作東公民館		10		1
	29 作東吟詠愛好会	吟 詠	光 辻 猛 美	衣 簀 義 文 井 口 敏 磨	月 2 回	作東、土居、吉野公民館 作東老人福祉センター		42		2
	30 コール作東	コーラス	山 本 文 子	池 田 直 美	月 2~3 回	作東公民館		23		1
	31 舞踊の会	舞 踊	井 上 美 智 江	溝 口 樹 香	月 3 回	作東公民館		8	8	1
工 芸 部	32 ちぎり絵がんびの会	ちぎり絵	名 部 竹 夫	名 部 竹 夫	月 1 回	栗井教育集会所	プラザ展示	35		
	33 江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	大 崎 安 江	杉 本 幸 子	月 1 回	作東公民館		7		2
	34 福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	青 山 美 和 子	杉 本 幸 子	月 1 回	福山公民館	土居小学校多目的広場・山の学校ロビー	7	1	
	35 フラワー工房JUN (押花教室)	押 花	山 本 淳 子	山 本 淳 子	月 1 回	J A 勝英作東支店	ファーマーズ押花合同作品展&体験会	8	37	
	36 押絵ちぎり絵むつみ会	押 絵 ちぎり絵	小 林 艶 子	山 本 津 多 江	月 2 回	横林集会所	プラザ・土居小学校	10		
	37 フラワー工房JUN (山の幸染め教室)	染 物	山 本 淳 子	山 本 淳 子	月 1 回	小房コミュニティハウス	ファーマーズ山の幸染め合同作品展&体験会	8	22	
	38 吉野おきな草	機 織 古民具利用	小坂田 尚 子	福 原 朱 美	月 1-2 回	旧吉野幼稚園	①きんちゃい館の行事に合わせて年3回以上 ②那岐山麓山の駅にて9~10月頃合同で1回	10	1	
棋 道 部	39 双山囲碁クラブ	囲 碁	横 山 廣 志		月 4 回	栗井教育集会所	年3回作東老人福祉センターにて大会	19	51	
情 報 映 像 部	40 お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥 形 初 美		月 4~5 回	作東老人福祉センター またはインターネット上		9		1
手 芸 部	41 編物教室	手 あ み	妹 尾 さ と 子	妹 尾 さ と 子	月 4 回	作東公民館 船曳文子宅		12		
	42 ビーズを楽しむ会	手 芸	妹 尾 さ と 子	西 坂 暁 子	月 1 回	作東公民館		10		

597人 145人 65人

平成19年度 作東文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
19	3	25	作東文化協会総会	バレンタインプラザ
	4	18	第1回理事会	事業計画、会員募集、文化誌編集委員会について
	5	16	文化誌編集委員会	編集委員長選任、編集方針について 以降4回開催
	6	8	第2回理事会	研修旅行について、文化誌原稿募集について、秋の文化展について
	9	9	研修旅行	鳥根県 出雲方面
	9	12	第3回理事会	秋の文化展について
	10	12	文化誌33号発刊	全会員に配布
	10	27・28	秋の文化展	海洋センター 各部及び一般
	11	4	生涯学習まつり	生涯学習まつり「パネル展」出展 大原武蔵武道館 各部 ~11日
20	1	23	第4回理事会	春の文化展、芸能発表会、総会について
	3	12	第5回理事会	総会について
	3	22・23	春の文化展	美術館、バレンタインプラザ、改善センター
	3	23	文化発表会	バレンタインプラザ(芸能部)

【各専門部・支部活動】

年	月	日	部名	内容
19	9	7	書道部	白雲書道会/白雲書道展 作東美術館 ~9日
	5	1	絵画部	油彩/春の絵画展 ~7日
20	2	22・23		日本画/さつき会日本画展 作東美術館 ~27日
19	11	10	園芸部	山野草/灯りと山野草展(きんちがい館)
	11		文芸部	短歌/プラザ東側展示 (11月・3月)
	4	27	歴史部	地名研究会/事業計画・運営体制協議、地名研究 年7回開催
	8	1	写真部	展示 プラザ東側
	11	15		佐用郡展 出品 ~18日
	4		陶工芸部	絵手紙/プラザ東側展示
	5			水墨画/プラザ東側展示
	7	4	芸能部	芸能部役員会 年6回
20	3	23		第3回作東文化協会文化発表会
19	4	21・22	手芸部	押花/押花合同作品展と体験会(展示、体験会)
	6	5	江見・豊野支部	江見・豊野合同評議員会
	11	11		江見・豊野合同研修旅行
	5	31	土居支部	評議員会
20	3	25	福山支部	評議員会
19	4	20	粟井支部	囲碁大会 年2回
	6	5		評議員会 年4回開催
	10	7		春日歌舞伎公演出演
	4	1	吉野支部	里山歩き
	6	12		吉野支部評議員会 年2回
	10	12		私の好きな作品展
	11	17		吉野支部研修旅行
通年事業			書道部	阿部書道会/毎月第2・第4水曜日 白雲書道会/作東公民館 里見明宅 月2回
			絵画部	日本画/作東公民館 毎月第2・第4木曜日 油彩/環境改善センター 毎月第1・第3土曜日
			園芸部	山野草/きんちがい館 毎月第2土曜日
			茶華道部	華道/作東公民館 毎月第1・第3土曜日 公民館に毎月展示 茶道/作東公民館 毎月第2・第4土曜日
			文芸部	川柳/偶数月第1水曜日例会 短歌/3教室 各月1回
			歴史部	歴史地名研究会/毎月1回 古文書を読む会 I・II/毎月第3金曜日
			陶工芸部	絵手紙/毎月1回 水墨画/毎月2回
			芸能部	吉野ハビネス、琴伝流大正琴、早瀬流剣詩舞道、作東吟詠同好会 コール作東、舞踊の会/月2回~月8回
			棋道部	囲碁教室/作東公民館 毎週土曜日 粟井教育集会所 毎週月曜日 囲碁大会 3回
			情報映像部	作東文化協会ホームページの更新(随時) 情報映像部会(パソコン講座) 毎月第3水曜日の翌日 パソコンサークル 毎週水曜日
			手芸部	手芸/毎週月曜日、ピース/毎月第2木曜日 押花/月1回、山の幸染め/月1回
			各専門部	プラザ東側、美術館展示

※秋の文化展、春の文化展、生涯学習まつりの出展は、全体行事に含んでおります。

編集後記

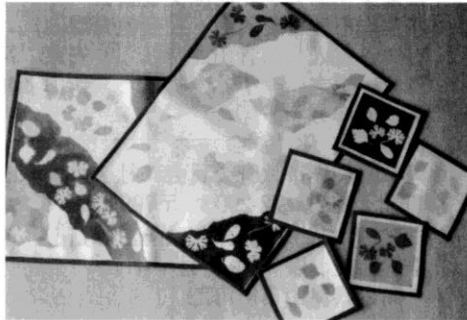
文化協会専門部の部長さんとそれに属するグループ代表の皆さんの協力を得て、グループ調査を実施、その集計結果を、平成二十年度版・作東文化協会専門部グループ紹介」という形で掲載させていただきました。

これによって本誌も、会則・事業報告・決算書・会員役員名簿と共に、機関誌としての役割をはたしたのではないかと思っています。

この一覧表を見て改めて、その多岐多様なグループ数と会員数の多さに驚くと共に誇りに思います。

文化協会活動の基本はグループ活動です。これを機にさらなるグループ活動の発展と継続を切望します。

編集委員会



山の幸染め 山本淳子

作 東 の 文 化

第 34 号

平成20年10月15日発行

.....

編 集	作東文化協会文化誌編集委員会 (美作市教育委員会 社会教育課内)
編集委員	谷口 重人 青山 時弘 安東 靖雄 梅澤 紀之 小林 秀雄 新田 祐之 原 洋一
発行所	作 東 文 化 協 会 岡山県美作市教育委員会 社会教育課内 TEL (0868) 72-2900 〒709-4292 HPアドレス http://bunka.boj.jp/
印刷所	株式会社 廣 陽 本 社 岡山県津山市田町22